

西神ニュータウン研究会 会報

第203号 2020年3月

■第203回例会記録

- ・日時 2020年2月18日(火) 18:30~20:30
- ・場所 ユニティ特別会議室 ・参加者 28名
- ・テーマ 1970年代の神戸市巨大プロジェクト
～計画段階での論点と50年後の住民の眼～
- ・講演者 楠本 利夫氏(神戸市OB、博士<国際関係学>、
日本パン学会副会長、神戸外国人居留地研究会理事)



<講演要旨>

1. 国際都市神戸の原点・開港(1868.1.1)

開港した神戸に各国は領事館を設置し世界中の貿易商が商館を開いた。国内からも人々が神戸に移住した。新来住民は身近な外国人の生活文化を抵抗なく取り入れ、進取の気風と国際色豊かな文化を根付かせた。わが国の県庁所在地は殆どが城下町であり街の象徴は城であるが、城下町ではない神戸の象徴は国際貿易港と国際性であった。

2. 神戸市人口の推移

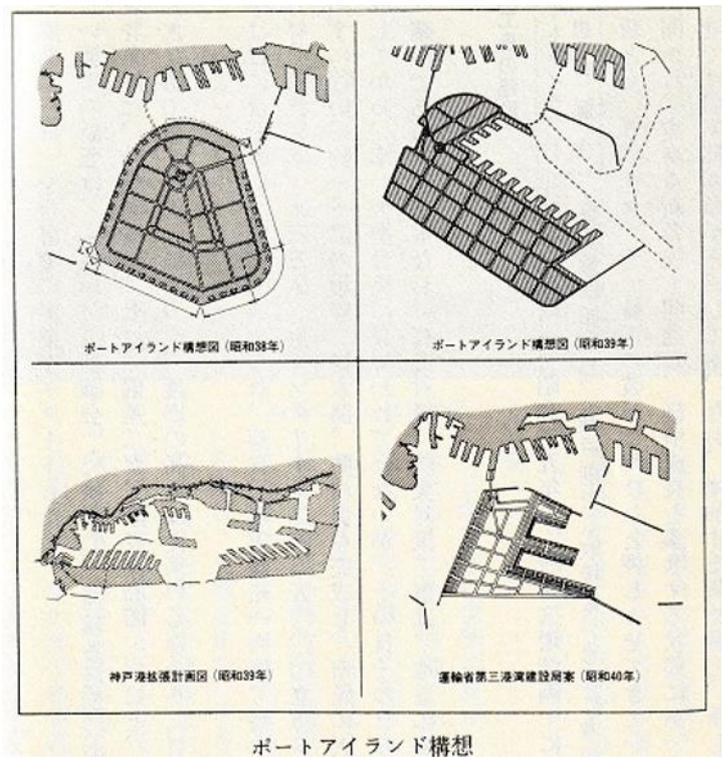
神戸市発足時(1889年)の人口は13.5万人。50年後の1939年に初めて100万人を突破し、戦災・震災を経て、2011年に過去最高の154.5万人を記録した。その後、人口は漸減し、2020年には152.2万人(国内7位)になった。

3. 1965.11:「神戸市総合基本計画」(マスタープラン)

目標年次を1995年の人口を180~200万人(1965年:122万人)と設定し、臨海部を港湾と臨海性工業地帯とし、西神地区は「既成市街地への人口・産業流入を防止し副都心機能を持つ」ニュータウン建設等を盛り込んだ。

ポートアイランド形状の推移

(鳥居幸雄『神戸港1500年』海文堂)



ポートアイランド構想

4. ポートアイランド

1964年、原口忠次郎市長が神戸港の防波堤外に人工島を建設し「自由港」とする構想を発表した。ポートアイランド(PI)は、外郭をコンテナふ頭等、中央部を都市機能用地とし、1981年に完成した。

中央部の土地利用は「未知への挑戦」であった。内外の識者から寄せられた案は、いずれも採算性を度外視したものであったため、最終的に市職員の提案どおり、中央部は住宅と国際街区とし、完成記念にポートピア81博覧会を開催した。

5. 70年代の大規模開発事業の評価

今日の神戸を支える事業として評価できる。PIは「埋立地」ではなく、わが国初の「海上都市」で、抜群のネーミングで、コンテナふ頭と国際街区が世界につながる神戸を演出した。西神ニュータウン (NT) はわが国初の職住近接型都市である。

<意見交換など>

Q: ポートアイランドと西神 NT、どちらの計画が難しかったか？

A: PI 都市機能用地は、まったく先例がないという意味で桁違いに難しかった。国際街区は斬新な土地利用だ。土地を売却し外債を償還しなければならない。公的住宅は土地を確実に処分できるため導入した。ポートピア博で、神戸の知名度が上がり、海上都市が人々に認知された。コンテナふ頭先行整備で神戸が世界有数のコンテナ港になった。PI がなければ今日の神戸はもっと衰退していただろう。

Q: 西神 NT 計画段階での課題は？

A: 住宅団地と工業団地の一体的開発だ。根拠法が異なるため、工業団地の立地企業・従業員に住宅団地の土地を優先的に分譲できなかった。工業団地の環境対策は、米国の例に倣い、立地企業にセットバック・緑化義務等の協力を依頼した。

Q: 西神ニュータウンは、なぜ、地下鉄の延伸順に、学園都市→西神南→西神 NT の順に開発しなかったのか？

A: 「職住近接型 NT」を先行整備して「西神戸の副都心」とすることが背景にあったからではないか。

それとも、なんらかの政治的思惑があったのかもしれない。

Q: 事業の評価は？

A: プロジェクトは成功したといえる。ただ、西神中央の商業施設配置、広場配置、西神戸有料道路からの道路は、西神 NT 内を地下で通して 175 号線に結ぶべきであったなど、後になって気がついた点もある。



西神ニュータウン開発基本構想

(神戸市「西神ニュータウン開発基本構想」(1969年5月))

